

生成の根據としての自然：アリストテレス解釋

田中，晃

<https://doi.org/10.15017/2556631>

出版情報：文學研究. 25, pp. 37-53, 1939-06-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



生成の根據としての自然

—— アリストテレス 解釋 ——

田 中 晃

アリストテレスの哲學が事象の具體的把握を目ざすものであることは、もとより周知のところではあるが、ここにはその一面を語るものとして、彼の自然の把握に就て、簡単な解釋を試みたいとおもふ。勿論、アリストテレスの自然概念がいかなるものであるかを規定するためには、希臘哲學一般の自然概念を背景として、アリストテレス自身の多方面の著述を涉獵し、極めて周到な考察を加へなければならない。しかもアリストテレス自身は、あまりにも事象に忠實であらうとするために、時に觀點の徹底を缺き、時に所論の矛盾を含む場合もあるが故に、彼の抱く自然概念を精密に規定することは實に容易ならざる大問題であると云はねばならぬ。私は固よりかかる大問題の解決を企てるものではなく、僅かにその自然學の一部面に即して、彼がいかにして自然を考へるに至るかのデンクワイゼを見、それが現代の哲學に對して與へる示唆を汲み取らうとするまでである。

およそ事象を具體的に見れば見るほど、そこには相矛盾せる側面が看取される。特にこの矛盾が表面的に浮かび出てくるのは生成の現象であらう。白きものが黒くなり、冷たきものが熱くなるといふ生成の現象は、寔に解し難き矛盾であると云はねばならぬ。けれども白を白、黒を黒として概念的に固定することなく、白きものの黒くなりゆく矛盾

を解明してこそ、一つの事象を具體的に捉へることができるのである。アリストテレスが好んで生成の問題を論ずるのは、たまたま彼の具體性への關心を語るものにほかならない。ただ生成は矛盾の現象であるが故に、これを扱ふ論理は單なる概念の操作を以ては解し得ざる一つの困難に直面せざるを得ない。アリストテレスに於ても、生成の問題に直面するとき、その論理は極めて困難となる。が、いかに困難な論理といへども、その論理が成立するためには、アボリアをエッボリアに轉ずる何等かの可能根據がなければならぬ。アリストテレスに於てこの可能根據となつたものが事實上自然にほかならなかつたのである。隨てアリストテレスの自然の概念は生成の問題を通路として把握するものが最も正當であると考へられる。私はいま主として自然學の一部面に於ける彼の觀點を追ひつつ、その解釋を試みようと思ふ。

一

吾々は普通、甲から乙が生ずると云ふ。この場合、甲と乙とは相異なれるものであるが、その相異が單に數的なものか、または質的なものかは、區別して考へなければならぬ。いま假りにこの區別を外にして考へてみても、甲から乙が生ずるといふに就ては、次の三の場合を考へ得るであらう。

甲

乙

一、無教養

↓ 教養

二、無教養の人

↓ 教養ある人

單一なるものより單一なるものへ

三、無教養の人――教養ある人――複合せるものより複合せるものへ

説明……第一の場合は、無教養の状態から教養ある状態へ移るのであるから、これは単一なるものより単一なるものが生ずるのである。が、右のことがあり得る場合、具體的には、無教養の人が教養ある人になるのである。つて、この具體的生成から人を捨象した場合に、第一の如く單なる甲状態より乙状態への生成が考へられるに過ぎない。

仍て次にはこの捨象されたる人を回復すると、無教養なる人が教養ある人になるのであつて、この場合、回復されたる人の強調は、總て無教養乃至教養といふ状態の捨象を結果するであらう。かくて第二は第一の逆ではあるが、依然として單一なるものより單一なるものへの生成である。

ここに第一、第二の綜合としての第三の場合が具體的な生成現象であるが、これは無教養といふ状態と人との複合せるものより、同じく教養といふ状態と人との複合せるものへの生成である。

この具體的な第三の場合の抽象的側面として第一及び第二の場合を分析して見たことは、しかしながら決して無意味ではなかつた。蓋し第一の場合の如く、無教養なる状態より教養ある状態が生じたとき、その無教養の状態は消失して了ふのであるが、第二の場合の如く、無教養なる人より教養ある人になつたときは、その人は依然として止まつてゐるが故に、この兩側面の分析は、およそ生成の現象には「止まる要素」と「止まらざる要素」の存することを示すのである。然らばこの二つの要素の分析は生成の現象に關して何を教へるであらうか。およそ生成が「甲が乙になる」こととして現はされるとすれば、まづ甲と乙との兩者、その性質に於て相異なるものがなければならぬが、し

かし甲は甲であり、乙は乙であるかぎり、甲より乙への生成はあり得ない。いま前例との關係に於て云へば、無教養は無教養、教養は教養として、互ひに反極 (enanti) をなすかぎり、生成の現象は起り得ない。生成があり得るためには、無教養が無教養として止まらずして教養にならなければならぬが、それが若し、無教養が全く消失して教養が新に發生するのであつたならば、兩者は全然別個の事象であつて「甲が乙になつた」と云ふことはできぬ。生成は慥かに止まらぬ現象ではあるが、しかも甲と乙とが何等かの連絡を有たなければ生成と云ふことができない。さうして止まらぬものが連絡を保つためには、止まるものを豫想しなければならない。その止まるものは、前例との關係に於て云へば、まさしく人に相違ない。しかしまた、その止まる人にのみ觀點を向けるならば、人は無教養なる人と教養ある人とに共通して常に止まつてゐるのであるから、そこには何等の生成もない。かくて生成は實に兩者の綜合として、無教養より教養へといふ止まらぬ現象が、止まるものとしての人の下に連絡を保つてのみ可能なのである。止まらぬものが止まるものを豫想するといふ右の考察は、しかし猶ほ形式的に過ぎないものであつた。いま一層内容的に考へるとき、抑々止まらぬ現象といふものはいかにして可能であらうか。元來、甲より乙への變化に於ては、兩者の間に相互の作用といふものがなければならぬ。たとへば冷より熱になるには、冷は熱に自己の性質を奪はれ熱は冷の性質を奪つて、それを自己の性質に變するのでなければならぬ。然るに冷と熱とが相互に矛盾せる反極であるかぎりには、この相互作用は行はるべくもない。何故ならば冷と熱とは、そのかぎり概念的對立であるが故に、冷は冷、熱は熱であつて、この間を打開融通する途はないのである。この打開は、冷と熱とが概念的對立でなくて、何物かの屬性となつてのみ可能であらう。それが屬性となるためには、それが歸屬すべき何物かがなければならぬ。

らぬ。さうして、その下に甲より乙への屬性の變化が起るといふ何物かは、アリストテレスの用語に依つて、基體 (hypokeimenon) なのである。冷と熱とは水の基體の下に、水の屬性として、冷より熱へ變化し、無教養と教養とは人の基體の下に、人の屬性となつて、無教養より教養へ變化する。かくみれば、甲より乙への止まらぬ現象そのものが、既に甲と乙とに通ずる基體を豫想してゐる。

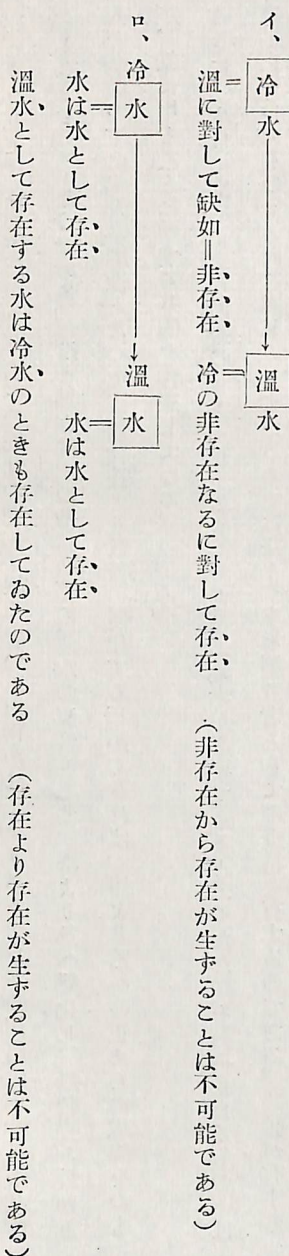
さきに、生成には「止まらぬもの」と「止まるもの」との二要素が必要であると云つたが、その「止まるもの」はその「止まらぬもの」と同じ次元に於てあるのではなく、寧ろ第三者としての資格を有するのである。基體が有する第三者としての意義はかくも重要であるが、それが往々にして見失はれることがあるのは、相異なる二つの屬性が明瞭に具はらずして、その一方が缺如 (stereis) せる場合があるからである。たとへば青銅から人像の生ずる場合、生成は、青銅と人像との二つの要素のみで起こり得るやうに見える。この場合、人像に對して人像なき状態は缺如である。しかし嚴密には、この缺如は、人像の形に對して、人像なき形としての意義を有してゐる。人像なき形より人像の形への生成が、青銅の基體に於てあり得るのである。この場合にも、止まるものは第三者の資格を保有してゐる。以上、吾々は生成の現象が「止まるもの」を豫想すること、そしてそれが第三者としての基體であることを把握した。

二

第三者としての基體の把握は、一見極めて自明的ではあるが、これは生成の問題に對する古來のアポリアを打開す

る鍵となる。古來の考へ方によれば、生成したるものは、存在するものからか、または存在せざるものからか、生成したのである。が、この兩方ともに不可能である。蓋し存在してゐるものは、既に存在してゐるのであるから、生成することはないし、存在しないものからは生成の有りやうがないからである。然らばこのアポリアが第三者としての基體によつて解かれるといふのは何故であらうか。吾々は凡てのものが存在か非存在かであるといふ明別を否定することはできない。しかもこの明別が何かの形で緩和されなければ、生成の可能性を證することもできない。

ここに具體的な例を擧げて考へると、醫者が醫術を施したり、施さなかつたりするのは、醫者としての資格に於てしてゐるのであるが、醫者が家を造るのは、醫者としてではなく大工としてである。醫者が醫者として事をなすのは、それ自身の資格に於てなすのであるが、大工として事をなすのは附帶的資格に於てなすのである。この「それ自身」と「附帶的」との區別を念頭に置いて更に他の例をとつて見よう。冷たい水が温るくなるのは何ういふことであらうか（アリストテレス自身の引例とは異なる）。



ハ、
冷水

↓
温水

冷は「イ」の如く非存在であり、水は「ロ」の如く存在であるが、冷水と綜合された場合の水は、水に附帶すべき屬性が非存在(冷)なる意味に於て附帶的に非存在である。それは附帶的に非存在なるに過ぎないが故に、この水を媒介として「冷水より温水へ」の生成、即ち「附帶的非存在より存在へ」の生成が可能となる。

かやうにしてアリストテレスは、存在と非存在との明別を「附帶的」意味に於て緩和することによつて、古來のアポリアをエッポリアに轉じ得ると考へた。非存在から存在が生ずるといふのは、非存在としての非存在からではなくて附帶的意味に於ての非存在からであり、存在から存在が生ずるといふのも同様の意味に於てである。ところで附帶的意味に於ての非存在とは、現實的存在に對する可能的存在を意味するが故に、この問題は現實性と可能性との關係からも解明することができる。ただそれは形而上學の問題として、吾々はアリストテレスと共にここには保留して置かう。寧ろこれまでの收穫として吾々の注意すべきことは「それ自身」と「附帶的」との分析であり、さうして附帶的なるもの(屬性)がそれに附帶しゆくべき何物かの豫想である。この何物かが「一」に於て述べた第三者としての基體であることは、いふまでもなく明白であるが、ここでは「止まるもの」として規定されたのに對し、ここでは附帶的なるものの前提といふ資格を明かにしてきたのである。

三

さて上述の如く存在と非存在とを附帶の意味に緩和せしめるもの、それが例へば温と冷との素地としての水であるとすれば、それは一見しても質料的であることは明白である。生成の問題を解くために要求された第三者としての基體は、かくして質料であるが、質料を第三者として掘り下げた所にアリストテレスの哲學史上の功績がある。アリストテレス以前に於ても、さすがにプラトンはかかる質料の意義に着目してはゐた。およそ生成の現象には、さきにも述べた如く、所謂エナンティア(例へば冷と熱の如き反極)が豫想される。これはプラトんに於ては一括されて「より大―より小」の規定によつて現はされてゐるが(フィレーボス篇)、ものが「より大―より小」の兩方向に向つて無限定的であるとき、これに一定の形相的限定を與へることによつて一定のものが成立する。ただ、この限定を受けるべき素地が「より大―より小」の兩方向に向つて無限定的であるが故に、假りに一定の形相の限定によつて甲が生じたとしても、それはまた直ちに乙に移るであらう。かやうに生成するものは一定の限定を缺くの故に、それは眞の存在と云ふことができない。けれども、ともかくも右の如き生成の現象があり得る以上、「より大―より小」の兩方向に無限定的なるものが、なほ一定の限定を受け容れるべき素地がなければならない。翻つて考へれば、「より大―より小」の兩方向に無限定的であるといふのは、容易に察し得るやうに、質料の性質であるが、質料が形相の限定を受ける以上、その受けるべき可能性がなければならない。質料の無限定性の故に、それが受け容れた形相の限定も、甲より乙へと無限に變化するとしても、しかも質料には、かかる限定を受け容れる資格がなければならない。この資格に於て要求されるものがティマイオス篇の場合(コーラ)なのである。

進んで考へるに、質料が「より大―より小」の兩方向に無限定的であるといふのは、質料が一定の形相を缺くこと

であるが故に、それは質料の非存在たる所以を示すものである。しかし、それが形相の限定を受け容れて一定のもの、甲となつたとき、なほ質料の無限定性に支配されて、より大(乙)にもより小(丙)にもなり得るといふことは、いかに考へるべきであらうか。甲は一定の形相の限定を有する故に存在であるが、これに對する乙乃至丙は、既に端的なる非存在なのではなくして、甲に對する他者(Alteron)なのである。それは甲でない意味に於て非存在たるに過ぎず、乙乃至丙として存在してゐるもの、即ち他者として存在してゐるものである。形相を缺ける質料(非存在)から一定の形相(存在)が生ずるといふことは不可能であるが、質料は本來他者としての資格を有してゐるのであつて、この他者によつて存在と非存在との明別が緩和されるとき、恰もアリストテレスの附帶的なものの考察と相通じて、生成の問題を解決することができよう。これは實にソフィステース篇の努力であつた。かくて質料は直接には、一定の形相を缺くの故に非存在(缺如)であるが、間接には、一定の形相に對する他者の資格を有するとすれば、質料と形相とは既に比較の地盤に於てなければならぬ。然らざれば他者と云ふことすら不可能である。この地盤は、形相なき質料を猶ほ形相と比較せしめるもの、即ち質料を形相の他者とするもの、更に換言すれば質料をして纏て一定の形相を帶ぶるに至る可能性として見るものとして、諸々の形相の限定を受け容れるべき資格に於ての質料である。それがテイマイオス篇の場所の擔ふべき役割であつたのである。果して然らば、それは甲(一定の形相)と乙(甲に對する他者)とを其處に於て成立せしめるものとして、アリストテレスの云ふ第三者としての質料と相通するに至るであらう。

かくてプラトン晩年の動向は近くアリストテレスを招く姿にあつたけれども、しかも初期イデア論の歸結を堅持するプラトンは、限定ある形相を存在とするに對し、無限定なる質料を非存在と解するに急であつて、第三者として要

求される場所へ、質料の資格を掘り下げることを好まなかつた。ここに於て相反の一極として非存在なる缺如の裏面に、ただ附帶的にのみ非存在なる質料を見、隨て附帶的なものが附帶しゆくべき基體的質料の位置を、反極の兩形相の素地として、そこに實在的意義を見出したのが、アリストテレスの功績としなければならぬ。故にアリストテレスは云ふ、『根柢に止まるものは生成するものの形に對しての共同原因となるもの、いはば母である。』(自然學第一卷第九章一九二A)

生成に於ては、例へば冷と溫との如く、相反の二極そのものが原因と考へられるが、それに對して根柢に止まる質料は共同原因をなすのである。根柢に止まるといふのは、生成消滅の可能性として、質料自身は生成消滅しないことを意味する。勿論、その質料の素地に於て、相反の二極が一極より他極へ移る意味に於て、即ちそれが相反を含むかぎりに於ては生成消滅するのであるが、それ自體としては生成以前であり、消滅以後であるもの、かかる質料が生成の共同原因として母の資格を有するものである。さうして此處にアリストテレスのいふ自然の意義もある。『それは自然そのものであり、生成以前のものである。』^{*}吾々はそれを凡ゆるものの根柢に存する第一質料と呼ぶ、それから、ものは内含されたものとして、生成してくるのである。しかも附帶的にはないのである——若し消滅するとすれば、この最後のものへ行くのである。』(自然學第一卷第九章、一九二A)

「一」に於ては「止まるもの」であり、「二」に於ては附帶的なものの前提であつたものは、いまや「三」に至つて第二質料としての性格を明白にしてきたのである。

* 單なる冷より溫への變化は附帶的であるが、冷水より溫水への變化は附帶的でなく實體的である。

四

さて上述の自然は専ら質料の意味に解された。それは、人像の自然が青銅であり、机の自然が木材である、といふ意味にての自然である。一般的に云へば、各々のものに、それ自體に於て、未形成的に、第一に、内含されてゐるものを指すのである。それは各々のものの自然であり、本性であり、實體であるが故に、爾餘のものは、この自然の屬性であるか、若くはかかる自然より構成されたるものに過ぎない。

しかし、上述の如き質料としての自然が、自然の有する意義の全部ではない。寧ろ却て質料に對する形相こそが自然である。たとへば、その可能性に於て骨や肉であるものも、吾々が何が肉であり、何が骨であると定義して云ふ所の形相をとらざるかぎりには、なほ未だそれ自身の自然(本性)を有たないのである。かゝる形相としての自然は、吾々がものに定義を下すときの概念そのものであるが、それは質料の意味の自然よりも寧ろ勝義の自然である。蓋し質料に於てはものゝ可能性が、形相に於てはものの現實性が意味されてゐるからである。

さうして形相因と目的因とが同置されるやうに、自然が既に形相の意義を有するならば、それはまた目的でもなければならぬ。それは、「生成は自然への道である」と語られるときのその自然である。生成は、たとへば成長の場合の如く、或るものへ向つてゆく。或るものとは何であるか。それから生じ來つたものではなくて、それへ成長しゆくそのものは、櫟の種子が成長しゆく目的としての櫟の木である。それは櫟の自然(本性)であり、目的であり、形相である。

目的と形相とは、しかしながら同一のものを異なる意義に於て見たものに過ぎないとするならば、自然は尠なくとも、質料と形相との二つの意義に於て語られてゐる。が、質料と形相とは正に相反するものであるとすれば、いかにして自然はこの二義を併有し得るのであらうか。アリストテレス自身はこの併有を當然のこととして許してゐるやうであるが、しかしこの問題はアリストテレス哲學の一難問として徹底的に究明されなければならない。いまはこの問題に深く立ち入る意思はないけれども、その解決の方向のみは探り得るかと考へる。さうしてこの方向を示唆するのは、自然と技術との比較であらう。

アリストテレスに於ては技術と自然とは屢々類比的に考へられ、特に兩者ともに一定の形相を目的とする合目的活動なる點に於て、その共通性が指摘されてゐる。自然が合目的であるか否かは勿論それ自身で一個の問題である、否所謂機械論的自然觀の洗禮を受けたものにとつては、寧ろ是認されざることであらう。アリストテレスもこれを意識するが故に、自然學第二卷第八章及び第九章に於ては、自然の合目的なる所以を相當詳細に論じてゐる。いまはその一々を述べる必要はないが、ここに興味のあるのは自然と技術との比較である。技術は、たとへば木材から舟を造るといふやうに、一定の質料の性質を豫想して、これを一定の目的に導びくものである。さうしてその質料の性質は自然によつて與へられてゐるのであるから、技術は自然に基づくものでなければならない。技術と自然とは決して夫々の原理を異にしてゐるのではないのである。隨て逆に、技術が一定の目的に達する合目的活動であるとすれば、それと原理を等しくする自然もまた合目的でなければならない。

右の論證は論證として必ずしも完全なものではない。けれどもアリストテレスが自然現象の合目的性を把握しよう

とするその觀點の強韌性こそ最も重要なのである。が、目下の吾々にとつて特に興味があるのは、合目的性の問題よりも、寧ろそれに先立つて、技術が質料を豫想する所から技術と自然との原理の同一性を見ようとする立場である。技術が質料を豫想する故に、自然と同一原理を有するといふ見方よりすれば、技術に於て自然的なるものは、その質料である。技術は隨て、人爲によつて、自然なる質料に形相を附與するものである。この形相の附與が自然なる質料を豫想するが故に、云ひかへれば形相の附與とは質料に内在する可能性を現實性に發展せしめることであるが故に、技術は自然の模倣なのである。しかしながら他方よりみれば、木は、これを土に埋めたときには發芽するであらうものを、或は机とし或は舟とする技術は、自然のままではないものを造り出すのであるから、自然を一層發展せしめるものでもある。

技術的生成とは、かやうに、質料に形相を附與するのであるが、自然的生成とは、それ自身による生成である。それ自身による生成に於ては、しかるに、形相より形相が生ずる。人は人より生まれるのである。

技術に於ては質料から形相が生じ、自然現象に於ては形相から形相が生ずるのであるが、しかも兩者の原理が等しいとすれば、吾々がそこから察知し得ることは、アリストテレスの所謂「形相」と「質料」との関係は、決して二元的區別に立脚するものでないといふことである。形相が人爲的に附與されるときは、質料を自然と呼び、形相がそれ自身生じ來るときは形相を自然とするのは、ただその場合々の觀點による。形相を人爲的に與へる技術も、自然の質料の性質を可能性より現實性へ發展せしめるものに過ぎず、これに對する自然的生成も、形相の附與が人爲的でない故に、形相から形相へ移ると考へられるのではあるが、その形相は勿論質料の形態なのであつて質料を離れるもの

ではない。ただ形相の附與が人爲的である技術に於て、ことさらに質料を自然と呼ぶに過ぎないのである。

技術的生成と自然的生成との關係から、吾々はアリストテレスの「形相—質料」の關係が決して二元的區別にあらざる所以を見た。それによつて上來の問題であつたもの、即ち何故に自然を質料といひ、何故に自然を形相といふかの問題にも、原理的には答へ得たのである。質料と形相とは、同じものの可能態と現實態との區別に過ぎないが故に、その現實態たる形相を勝義の自然とするが、それは可能態の發展なるが故に、質料の帯びたる形相なのである。

五

吾々は、ここまでは大體アリストテレスの觀點を追つて來た。しかし此處に至つて吾々自身の一層根本的な問題に撞着せざるを得ない。技術的生成の「質料→形相」關係に於て、いまはその質料を自然と見做してきたが、それは吾々が「二」及び「三」に於て述べた質料乃至自然の意圖を尊重したものではなかつた。たとへば木材より舟のできる場合には端的に木材より舟と考へるのでなく、先づ舟の形相を缺ける缺如を考へ、この缺如より舟なる形相が生ずるのであると考へなければならぬ。しかも缺如は非存在でありながら、非存在より何故に舟なる存在が生じ得るかと云へば、缺如の裏面にある質料は端的なる非存在ではなく附帶的に非存在なのであり、附帶的に非存在である以上、やがて附帶的なるものの附帶しゆくべき素地として、根柢に存する質料が要求されたのであつた。されば「木材→舟」の場合に於ける木材も、直接には舟なる形相に對する缺如であつて、間接にはこの事態を媒介して、この事態の可能根據としての質料の意義を有するのでなければならぬ。さすればアリストテレスが自然的生成と考へる

「形相→形相」の關係に於ても、かかる質料は依然として根柢に豫想されなければならない。否、人が人より生れる、と云つても、生む人の形相に對して、生れる人の形相は當初には存在しない、それは缺如である。形なき人が形を有してゐるところには、缺如の附帶しゆくべき根柢的な質料がなければならぬ。このかぎりには技術的生成と自然的生成とは全然區別を有しないのである。しかも一方は技術的生成として、他方は自然的生成として兩者相異なるのは前者は人爲的に人が机を造る、即ち主體が客體を造るのに對し、後者は主體が主體を生むのである、といふ一事である。さうして、主體が客體を造るとき客體の質料を所與として豫想するのは當然であるとしても、主體が主體を生むとき、猶ほ且つ豫想する質料とはいかなるものであらうか。それは人が人を生むときに、人が人を生み得る能力にほかならない。かかる根柢的な質料、根源的な可能性、それが即ち自然にほかならない。

さて主體が主體を生むといふことは、端的にみていかなることであらうか。人は歴史の問題に觸れるとき、現在に過去の子であり、未來の母であるといふ。しかもこの言葉を往々譬喩的に解し去つて、その文字通りの意義に肉迫しようとしぬ。この言葉は、歴史的時間は過去、現在、未來が互ひに相關聯するといふが如きことを漠然と意味するものであつてはならない。さうではなくて、現在は過去の子であり、未來の母である如く、「生むもの」と「生まれるもの」との關係に於て歴史が成立することを教へてゐる。

生むと生まれる關係に於ては、アリストテレスが屢々『人は人より生まれる』といふ引例を試みるやうに、兩者ホモエイデース(同種)である。即ち生むものが主體であれば、生まれるものも主體である。が、生まれるものは、生まれるものでありながら、何故に生むものと等しく主體であり得ようか。生まれるものは直接には生むものから生まれる

のである。そのかぎりには、生まれるものは生むものに依存する。生まれるものは生むものと等しく主體的ではあり得ない。が、生まれるものは直接には生むものから生まれるとしても、かかる「形相→形相」の生成のあり得るためには、上述の如くその根柢に基體的質料がなければならぬ。この基體的質料たる根源的能力に立脚して、生むものは生み、生まれるものは生まれるのであるから、兩者俱に主體的たり得るのである。しかも直接には、生まれるものは何處までも、生むものから生まれるのであるから、その順序による依存關係を保有する。かくして、主體と主體とが前後の系列を形成したとき、まさに歴史は出現するのである。現在は過去の子であり未來の母であると云はれるときにも、この關係が示されてゐる。所謂自然的時間の經過に於て、現在が單なる過去よりの繼續であり、未來も同様に現在よりの繼續であるならば、歴史は成立しない。現在が過去の子であり、未來の母であると云はれるのは、デイルタイなどの所謂プレゼンツ（現在）の概念が示す如く、過去と未來とが現在に於て同時存在であるといふ意義を示してゐる。即ち現在の獨立性、主體性を示してゐる。過去は現在の過去であり、未來は現在の未來なのである。しかもかかる現在のみで歴史は成立するのではなく、この現在がまた過去より生まれた子であり、未來を生む母でなければならぬ。かかる主體と主體との前後關係に於てのみ歴史は成立する。さうであるならば、歴史の秘密を解き、歴史の可能根據をなすものは、實にアリストテレス的自然であると云ふことができよう。

吾々は自然の概念を追ひつつ、圖らずも歴史の問題に觸れた。アリストテレスが生成の可能根據を求めて自然に觸れたデクノワイゼに隨へば、これは寧ろ當然であらう。蓋し生成は歴史であるが故に。

右の如く、歴史の可能根據として求められた自然は、云ふまでもなく質料的意義に於ける自然である。歴史の根據

として自然を求めるといふこと、それは吾々自身の任意なる解釋ではあるが、しかしアリストテレスのデンクワイゼから當然に歸結すべき重大なる示唆であると考へる。しかもアリストテレスの示唆はこれに止まらない。「四」に於て述べた如く、質料と形相とは原理的區別を有するのではなくて、質料としての自然よりも形相としての自然が一層勝義であるとの見方に隨へば、歴史が質料的自然を前提とするといふ右の解釋は、同時に、歴史はまさに形相的自然である、との歸結を齎さなければならない。かくて歴史は實に勝義の自然なのである。自然は歴史の可能性であり、歴史は自然の現實性であると云へば、一層適切なる表現であらう。が、省みてこの解釋はあまりに大膽に過ぎないであらうか。否、吾々は吾々のアリストテレス解釋の大膽に過ぎないかを恐れるよりも、歴史と自然とを峻別しようとする近世的思想の獨斷に對する反省の足らざるをこそ恐れるべきであらう。そこに於ては、歴史は空虚となり、自然は盲目となるよりほかはない。歴史と自然との關係に就て、いま根本的に考へ直さなければならぬのではあるまいか。事象の具體性を目ざすアリストテレスの哲學から、吾々にかかる重大なる示唆を與へられてゐるのである。

(昭和十四年四月十四日)